

# 保幼小の円滑な接続を図るスタートカリキュラムの編成と実践

## ～小学校組織における保幼小接続コーディネーターの役割を通して～

小出 洋介（学校経営コース）

### 1 はじめに

平成 29 年の学習指導要領改訂では、幼児教育から高等学校の教育に至るまで、資質・能力を一貫して育成することの必要性が述べられている。幼児教育では、「子どもは主体的な活動である遊びの中から学ぶ」という考えのもと、そもそも資質・能力の育成に重点を置いている。この点において、幼児教育の意義が、小学校での資質・能力の育成に関して参考になる。

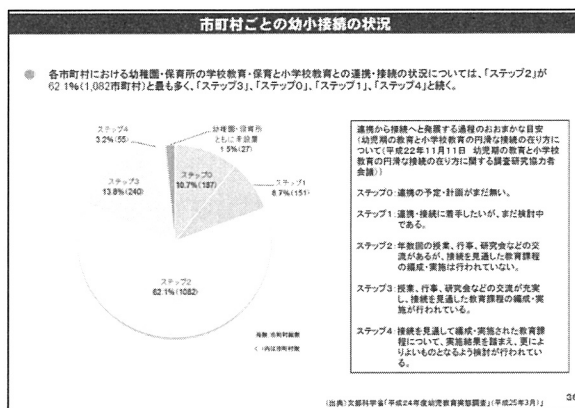
小学校において資質・能力を一貫して育成するためには、スタートカリキュラム（以下「SC」とする。）が必要であり、それは幼児教育の意義を踏まえて編成されることが重要である。

幼児教育の意義を踏まえて、SC が編成されるように手立てを行い、SC 実践者への支援を行うことは、保幼小接続の取組を運営するコーディネーター（以下「Co」とする。）の役割である。同時に、小学校職員に、幼児教育の意義や保幼小接続の必要性を浸透させる役割も担う。保幼小接続 Co として実践を行うことで、その役割を明確にしようと考えた。

### 2 保幼小接続についての実態

#### (1) 全国の実態

平成 28 年の中教審答申の記述の根拠となった「平成 24 年度幼児教育実態調査」の中で、以下の資料が示されている。



（中央教育審議会 教育課程部会 幼児教育部会 第1回 配付資料9「幼児教育に関する資料」（平成27年10月23日）

この資料からも、「幼児教育の重要性や幼小接続の趣旨はおおむね理解されてきており、幼小の交

流の活動等も進んできた。一方、教育課程の接続（子どもの発達と目標となる資質・能力の共通理解）が十分でないことが課題である。」という実態が分かる。

#### (2) 新潟県の実態

「新潟県教育月報6月号第761号」（新潟県教育委員会、平成25年6月）には、平成24年度小・中学校教育課程の編成・実施状況等に関する調査結果が以下のように示されている。

幼稚園・保育所の幼児と小学校児童との教育活動の交流	95.3%
幼稚園・保育所の職員との交流（研修会・情報交換会等）	98.8%

（対象：新潟市内の小学校を除いた新潟県内の小学校）

また、「生活科を中核としたSCの編成による指導方法等の工夫」を実施したかについて調査結果は、以下のようになっている。

SCの編成による指導方法等の工夫をした。	62.9%
実施した取組（SCの編成による指導方法等の工夫）について、幼稚園・保育所との連携をした。	59.0%

これらの調査結果から、新潟県においても、全国的な実態と同様に、交流が盛んになった一方で、教育課程の編成が十分ではないと分かる。また、県内のいくつかの小学校への聞き取りから、教育委員会等が中心となりSCを整備した学校でも、十分な活用に至らなかったり、各校によって取組の差が大きかったりするという実態が分かった。

#### (3) 黒条小学校の実態

現任校黒条小学校のある長岡市でも、教育委員会主催の保幼小接続のための研修が行われている。ところが、市内の小学校への聞き取りから、SCを整備している小学校は多くはないと分かった。

黒条小学校では、SCは整備されており、保幼小接続の取組も行われている。しかし、育成を目指す資質・能力についての職員間での共有や、子どもの発達の理解、系統性の視点からのSCの編成が十分ではなかったという課題が浮かび上がった。また、職員間での必要性や目標の共通理解のないままに、活動のみが進んでいたことで、職員の保幼小連携の必要性についての意識が薄く、取組が定着していなかったことも、課題である。持続可能な保幼小接続の取組には、組織的なSC編成と

実践が不可欠で、それらに取り組む職員の保幼小接続の意識が必要と考えた。

### 3 SC 編成の方向性

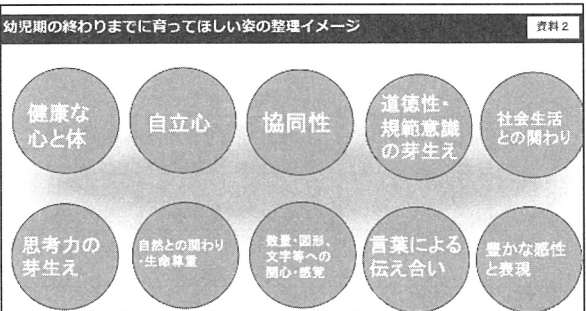
#### (1) SC 編成の課題と留意点

国立教育政策研究所の「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム」(文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター、2018. 3、学事出版)では、SCの編成について、以下のように述べられている。

<p><b>基本的な考え方</b></p> <p>○10の姿を踏まえ、発達や学びの様子を理解する。</p> <p>○短い時間の利用、意欲の高まりを大切に、思いや願いの実現のためにゆったりとした時間の中で行う。</p> <p>○この時期の児童の発達(自分との関わりを通して総合的に学ぶ)の特性を踏まえる。児童の意識の流れに考慮したつながりのある学習活動を行う。</p> <p>○人間関係が豊に広がり、学習のきっかけが生まれるよう、安心して自ら学びを広げていけるような学習環境を整える。</p> <p><b>編成の手順</b></p> <p>(1) 幼児の発達や学びを理解する。(10の姿を踏まえる。発達を理解する。)</p> <p>(2) 期待する児童の姿を共有する。(SCで期待する児童の姿を明らかにする。期間を検討する。)</p> <p>(3) 単元の構成と配列をする。(期待する児童の姿に合った単元を構成し、配列する。)</p> <p>(4) 週の計画と時間配分を行う。(短い時間の活用、弾力的な時間割の設定の工夫)</p>
--

ここでは、まず10の姿を踏まえ、子どもの発達を理解することが重要であることを強調していると読める。これは、実践する小学校職員が幼児教育の意義や子どもの発達を共通理解することが必要であるという筆者の見解と同様である。

なお、10の姿とは、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の通称であり、幼児期の実態理解や、園と小学校職員との子どもの成長の共有のための手がかりとして、平成29年の学習指導要領で示されたものである。



(中央教育審議会、2016. 8. 26、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」、幼児教育部会、資料2)

#### (2) SC 実践期間における10の姿の表出

生活科の単元「学校探検 給食室を探検しよう」の実践を基に、表出された10の姿を見取った。入学直後の子どもの姿の中には、小学校での学習の基礎となる資質・能力が表出していると分かった。

小学校の職員は、1学年の子どもが、探検活動のような活動性を重視した遊びの要素のある活動で学習の素地となる資質・能力を育てていることを認識する必要がある。それにより、その後の教育活動を効果的に運営することができるのである。小学校職員が10の姿や幼児教育の意義、遊びの要素を含んだ活動の有効性について学ぶ機会を確保することが、保幼小接続Coの重要な役割となる。

#### (3) 保幼小接続Coについての先行実践

広島県教育委員会が作成した「幼保小連携カリキュラム実践事例集」には、保幼小接続Coの役割は、以下のように示されている。

<p>○園・所等との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教育・保育内容や指導方法の相互理解を図るための、幼保小合同研修に向けた企画立案、連絡調整、運営を行う。</li> <li>・乳幼児・児童の実態を把握する。</li> </ul> <p>○小学校内での連携・調整</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・幼保小接続の考え方を校内で共通理解するための校内研修に向けた企画立案、連絡調整、運営を行う。</li> <li>・SCの編成、実施、評価、改善を進める。</li> <li>・管理職とともに、校内の協力体制の整備をする。</li> <li>・幼保小接続の考え方を保護者へ発信する。</li> <li>・特別支援コーディネーターと連携し、入学予定幼児の情報を共有する。</li> </ul> <p>○情報収集</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・幼保小接続に関わる研修等に積極的に参加する。</li> <li>・先進的な取組について情報収集する。</li> </ul>
--

(広島県教育委員会、2017、『幼保小連携カリキュラム実践事例集』)

この先行実践は、教育委員会等が中心となり、地域単位の学校間を越えた大規模な取組であるといえる。特に、「小学校内での連携・調整」として示されている保幼小接続Coの役割は、大規模な組織が立ち上げられていない学校においても、取り組むことが可能なものである。これを参考に、黒条小学校の実態に適した取組の内容や方法の視点から、保幼小接続Coの役割を検討した。

### 4 黒条小学校での保幼小接続を目指した取組

#### (1) 実態に適した保幼小接続の取組の在り方

##### ① 黒条小学校の実態と職員への意識調査

黒条小学校では、保幼小接続の取組を進めてきたが、SCの活用や保幼小接続の取組の継続が十分行われていなかった。それは、SC編成が組織的に行われていなかったことや、保幼小接続の意義や目的、当事者間の連携の欠如等が原因と考えられる。

そこで、職員の意識(聞き取り)調査を行った。調査の結果、小学校で教諭や講師の勤務経験のある職員34名中、1学年担任の経験のある職員は19名(特別支援学級1名を含む)であり、全体の約56%である。

回答の内容を分析すると、職員が1学年の指導で配慮している事項は、生活面から学習指導の方法まで多岐にわたり、1学年の発達段階に配慮していることが分かった。その一方で、組織構成や保護者連携などの回答も、全体の2割以上あったことから、職員の意識として、保幼小接続などの子どもを取り巻く大人間の連携についての悩みもあることが分かった。SCに関わる回答は約3%であり、SCの意識は少ないと考えられる。これは、黒条小学校では組織的なSC編成や、SCの意義の共通理解が十分ではないことを裏付けていると考える。そこで、全職員が、SCの意義について共通理解するための研修の機会を確保しつつ、SCの編成を組織的に進めるように計画した。

## ② 保幼小接続 Co の役割についての提案

保幼小接続の業務やそれに関連する職員をつなぐ保幼小接続 Co の具体的な役割について、以下の図のように示し、保幼小接続 Co の位置づけを提案した。先進校の取組を参考にし、黒条小学校の実態に合わせて、SC編成を中核とする組織づくりの要となる Co の在り方を提案したいと考えた。



## (2) SC編成にける保幼小接続 Co の役割

### ① 保幼小接続についての校内研修

平成31年1・2月に、保幼小接続の理解を促す校内研修を、SC編成と並行して行った。毎週木曜日の職員集会で5分ずつ、研修の時間をとった。各研修のテーマは、以下の通りである。

第1回	黒条小学校での今までの取組と課題
第2回	保幼小接続(SC編成、保幼小接続 Co)の必要性
第3回	SC編成についての具体的取組
第4回	保幼小連絡会での話し合いの報告
第5回	SCの全校体制でのマネジメント
第6回	SCにおける他学年の児童とのかかわりの検討

各学年から様々な意見が出てきており、職員は、短い時間の中で、各学年と1学年の子どもとのかかわりについて、この1年間を振り返りながら検

討していた。級外職員は、級外の立場から、学校全体の教育活動を振り返っていた。全職員が、当事者意識をもってカリキュラム編成にかかわる姿が見られてきた。

## ② 保育園・幼稚園と小学校との情報交換

SCの目標を設定するため、子どもの実態をテーマに園と小学校の職員による話し合いを行った。話し合いで共有した子どもの実態についてのまとめたものは、以下の通りである。

	いいところ	課題(もっとこうなってほしい)
個人の特性	元気、明るい、素直、一生懸命、意欲的、集中力	緊張、失敗への不安、集中力、気持ちの切り替え、自主性、自分の意見や思いや考えをもつこと
人間関係	コミュニケーション能力、思いやり、共感、気持ちの表現、協調性	コミュニケーション能力、自分の考えの表現、相手への表現
きまり、ルール		聞く、基本的な生活習慣、時間の意識、集団行動、周囲からの悪い影響、規範意識、仲間意識、自己中心性、ルールにとらわれすぎ

活発な意見交換ができ、小学校の職員が、園の職員の思いや考えに直接触れる機会を作ることができた。また、園の職員も、小学校での子どもの様子に強い関心をもっており、情報交換に意義を感じていたと話してくれた。

## 5 黒条小学校でのSCの実践と Co の取組

### (1) SCの実践

#### ① SC実践の際のチェックリストの活用

園と小学校の職員との話し合いをもとに、SCの目標を以下のように設定した。

知識及び技能	【集団生活における基本的な学習習慣や生活習慣】	小学校での集団生活におけるきまりについて知り、行動する。
	【身辺自立】	自分でやるべきことは、自分でやる。
思考力、判断力、表現力等	【コミュニケーション能力】	相手の話を聴いたり、相手に自分の思いを伝えたりしながら、人とかわる。
	【表現力】	自分の思いや考えを表現し、伝える。
	【思考力】	身の周りのひと・もの・ことに疑問をもって思考することができる。
学びに向かう力、人間性等	【想像力】	自分の行動が、周囲に与える影響について、想像する。
	【意欲】	小さな失敗があっても、あきらめず、新しいことにも意欲的に取り組む。
	【主体性】	受け身ではなく、自ら取り組む。

これをもとに、チェックリストを作成した。チェックリストでは、目標となる資質・能力を、各ステップで評価できるようにしている。各ステップでの目標となる資質・能力を、職員間で共有す

ることができると同時に、SCの実践に伴う指導とその評価とを一体化するために有効であった。

## ② SCの実践の具体

### 【1 学年担任としての実践】

編成したSCを基に、実践を行った。ステップ1では、小学校生活に安心感を与えると共に、子どもの意欲を發揮させ、学校でやりたいことを話し合わせた。また、子ども同士のかかわりを促す活動を各教科で行った。ステップ2では、話し合いで出たやりたいことをもとに、生活科で学校探検を行った。ステップ3・4では、運動会を目指し、集団としての意識付けを行った。

以上の実践を通して、SCにおいて、子どもの興味・関心や、主体性等の資質・能力を育成することができた。子どもの知識・技能と主体性とは相反するものではなく、バランスよく育成する必要がある。実践者には、これらの資質・能力の育成を意識して、実践にあたる姿勢が求められる。

課題は、実践終了を5月末に設定していることである。2ヶ月に限定することなく、長期にわたり、子どもの姿を見ていく必要がある。そして、つながりのある教育活動を展開していくことが重要である。

### 【保幼小接続CoとしてのSCのマネジメント】

筆者は、1 学年担任として実践を行いながら、保幼小接続Coとして、SCのマネジメントに携わった。特に、1 学年担任がチェックリストをもとに行った子どもの資質・能力の見取りを確認し、考察を行い、カリキュラムの評価、改善に努めた。

これらの担任による資質・能力の評価では、子どもの資質・能力の育成の課題として、以下のことが挙げられる。

- 自分から興味・関心をもって、活動する姿がまだ少ない。
- 人とのかかわりにおいて、自分の思いや考えを表現することに、個人差が大きい。
- 子どもの活動への興味・関心などについての意欲付けが、十分とはいえない。

### 【SC実施後の生活科の実践】

6月以降の実践として、生活科「先生と仲良し大作戦～サインをもらおう！～」を行った。これは、SCの継続を意識した取組である。

活動する子どもの姿からは、「主体性」「コミュニケーション能力」、「意欲」、「集団生活における基本的学習習慣や生活習慣」、「思考力」の育成を見取ることができた。学校中でダイナミックに活動する子どもの姿から、子どもの資質・能力の育成を感じた。

## (2) その他の保幼小接続Coの取組

### ① 園の職員による小学校の授業参観

保幼小接続Coとして、小学校職員と園の職員との連携を担当し、園の職員による小学校の授業参観を実施した。園の職員からは、子どもの10の姿と、小学校での子どもの姿とのつながりを意識した言葉が多く見られた。

### ② 幼児教育理解のための研修

研修では、以下のことを行った。1つ目に「子どもの主体的な活動である遊びの中から学ぶ」という幼児教育の趣旨の理解。2つ目に、小学校教育と幼児教育との比較。3つ目に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（通称「10の姿」）」の動画視聴と、具体的な保育場面の伝達。4つ目に、小学校での10の姿の表出についての検討である。

職員の感想を見ると、職員の幼児教育と保幼小接続に関する意識を変容させることができたと考えられる。幼児教育での子どもの見取り方の視点は、小学校でも活かせることなど、小学校職員が自分事として接続を捉えたと、分かった。

保幼小接続Coは、小学校職員に幼児教育や保幼小接続に関わる知識を伝え、意識変容を担い、小学校での活動に活かせるように働きかける役割をもっている。保幼小接続Coの取組は、学校間を越えた子どもの継続的な成長に影響する。

## 6 終わりに

研究を進める中で、子どもの学びは一貫していると分かった。子どもは、誕生から様々なことを学びながら、成長していく。幼児期での学びにおいても、幼児教育における様々な資質・能力を育んでいる。それは、小学校の児童期においても変わらず一貫しており、幼いころから育んできた資質・能力を發揮して、小学校における資質・能力を育成し、成長している。小学校の職員は、幼児教育で育まれた資質・能力を受け、一貫して育成を担い、中学校へと引き継いでいかなければならない。

学校種を越えた連携によって、学校教育全体における子どもの学びを担い、子どもの未来創造を具現化できるように努めたい。